

歴代誌第二12章14節「主を求める」

1A 行った悪事

1B 悪い助言

2B 防備への依頼

3B 主の律法の遺棄

2A 主を求めない悪

3A 心定め

1B 前もって決める事

2B 心で決める事

本文

私たちの学びは歴代誌第二に入っています。前回、ソロモン王の生涯を読みましたが、今日からその後のユダの王の業績を読んでいきます。午後には 10 章から 13 章までを読みます。今朝は 12 章 14 節に注目したいと思います。

彼は悪事を行なった。すなわち、その心を定めて常に主を求めることをしなかった。

1A 行った悪事

彼とは、レハブアムのことです。ソロモンの子です。彼の王としての生涯が、このような形でまとめられています。彼は悪事を行った者として書かれています。悪事と言えば、泥棒をしたとか、金銭を横領したとか、妻ではない女と寝たであるとか、道徳的、倫理的なことを思い浮かべるかもしれません。けれども、歴代誌の記録にはそのことは書かれていません。彼は、心を定めて常に主を求めることをしなかったことで、悪事を行ったとの評価を受けています。つまり、霊的なことから悪を行ったと呼ばれているのです。これから見ていきますが、彼は人間の王としてはそれなりの業績を収めています。ことさらに悪いことを行なっているようには思えません。けれども、神にとってはそうではありませんでした。主を求めなかった、ということは、深刻な問題であると神はみなしておられます。

1B 悪い助言

レハブアムが行ったことを眺めていきたいと思います。レハブアムはソロモンの死後、王となりました。けれども、北にあるイスラエル十部族の者たちが、あなたによって治められたくないと要求してきました。これまで重税をソロモンが課していたので、それを軽くしてくれないか？という要求だったのです。レハブアムは悩みました。懐柔策を取り、彼らを自分に引き入れればよいのか、それとも強権によって彼らを牧さないといけないのか、イスラエルをまとめるのにどうすべきかを悩みました。初めに、ソロモンと共にイスラエルを治めていた長老に相談しました。長老たちは、前者

を助言しました。負担を軽減して、彼らに優しいことばをかけるなら、彼らはいつまでもあなたに付いてくるでしょう、と言いました。

けれどもレハブアムは、その助言を退けて、自分と共に育ってきた若者たちの助言を採用しました。もっと重い税であなたがたを懲らしめる、という、彼らのわがままな要求を制裁という形で対応しようという助言を受け入れました。ところが、このことによってイスラエルの十部族はユダから心が離れて、レハブアムではなく、ヤロブアムを王として立て国を造ったのです。主が与えておられた一つのイスラエルを二つに分裂させた、その同年代の若者たちの悪い助言に聞き従ったところに彼の一つ目の失敗があります。

2B 防備への依頼

そしてレハブアムは、次にユダの町を防備で固めました。北イスラエルからの攻撃もありますし、そして周囲の国々からの攻撃もあります。これ自体、安全保障は国として何ら間違ったことではありません。けれども、国を軍事力で固めることだけで満足して良いのでしょうか？これらの防備によって、国が安全を保つと考えてよいのでしょうか？彼は物理的な安全だけで満足していました。これが彼の二つ目の失敗です。

3B 主の律法の遺棄

そして、12章1節にはこうあります。「レハブアムの王位が確立し、彼が強くなるに及んで、彼は主の律法を捨て去った。そして、全イスラエルが彼になった。」主の律法を捨て去りました。これが三つ目の失敗です。主の律法、すなわち聖書に書いてあることを捨て去りました。具体的には、イスラエルの神ではない、他の外国の神々を拝み始めたことです(1列王記 14:22-24)。

2A 主を求めない悪

主にこの三つのことが、悪事であるとみなされています。その三つに共通することは、主を求めなかったことです。イスラエル十部族の人々が、重税を軽減してくださいと要求してきた時に、長老に相談したのは良かったのですが、そこに彼が主なる神に祈り求めたという記録はありません。彼自身はよく考えたでしょうが、それはあくまでも彼自身の考えでした。そして、町々の防備を固めたのも彼自身の判断によるものですが、イスラエルの王は国の安全は主から来るものであるという信仰が必要でした。そして、人間の指導者であれば、例えば日本の総理大臣や中国の国家主席が、聖書を読まないと聞いても、「そりゃあ、クリスチャンではないし、アメリカの大統領でもないし。」となるでしょうが、聖書はイスラエルを神が選ばれたのは、イスラエルによってご自身が支配していることを証言させるためであることを教えています。だからイスラエルの王は、祭司の助けを借りて、律法の書を読んでいくことが神に命じられていました。神ではなく、人に頼り、物に頼っていったレハブアムは、主を求めないことによって悪事を行ったとみなされました。

今の時代、私たちはどう生きているのでしょうか？神はイエス・キリストを死者の中からよみがえら

せ、この方を主とし、頭とさせる教会をお建てになりました。今は、神は教会によって世界を罪に定めています。つまり、自分の生活や人生において、自分が神によって生まれ、神によって成り、自分の死もその後の世界も、自分に命を授けられた神に拠っているのです。一秒でも、自分の心臓を自分の意志で動かすことができるでしょうか？あと一分後に何が起こるかを正確に言い当てることができるでしょうか？自分は完全に、この天地を造り、自分自身を造られた方に頼っているのに、この方を求めないこと、これが聖書では罪と呼んでいます。

聖書の言っている罪とは、嘘や、不倫や、窃盗、詐欺という個別もの以上に、自分を造られた方を造られた方としてあがめないことです。「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。(ローマ 1:18-21)」

そしてすでにイエス様を知って、この方に拠り頼むことを決めた人は、イスラエルと同じように、キリスト・イエスにあって神の民であります。ですから、レハブアムの罪は私たちの罪にもなります。つまり、私たちが他の人々と同じように普通に生きていても、他の人々から普通であるとみなされる生活を送っていても主を求めないで生活しているのなら、レハブアムと同じことをしています。「神よ。高ぶる者どもは私に逆らって立ち、横暴な者の群れは私のいのちを求めます。彼らは、あなたを自分の前に置いていません。(詩篇 86:14)」神を自分の前に置かないのは、高ぶりであり、横暴であると書かれています。

3A 心定め

そこでレハブアムの生涯について、とても大切な言葉があります。彼は、実は主を求めていなかった訳ではありません。実は、歴代誌には同じレハブアムの生涯を描く列王記には出てこなかった逸話が載っています。それは、彼が主の御言葉に対して、「それは正しい」としてへりくだったことです。12章12節に「ユダにも良いことがあったからである。(12:12)」とあります。

では何をもって悪事だと、歴代誌の著者は述べているのでしょうか？もう一度14節を読みましょう。「彼は悪事を行なった。すなわち、その心を定めて常に主を求めることをしなかった。」主は求めていたのです、けれども心を定めていなかったのです。彼は時には主を求めますが、いつも求めるように心を定めていなかったのです。調子が良ければ、そのまま自分の判断で、自分の力で物事を解決していこうとします。心が定まっていないのです。

1B 前もって決める事

今、私たちが生きている時代の悲劇は、「意志」よりも「感情」を優先するようになったことです。「真実」とか「犠牲」というものの価値が下がってしまい、「効率」「結果」が優先されます。自分の感じていることが真実であると錯覚しています。その最たる例は結婚でしょう。なぜ、こんなに結婚が離婚へと終わるのでしょうか？恋愛感情というものに頼っていて、真実な愛、愛が深められていることを無視してしまっているからではないでしょうか？私の知人は、数年前フィリピンの女性と結婚し、赤ちゃんも生まれました。彼が言うには、フィリピンと日本が離れていることもあり、付き合ってから結婚まで数えるほどしか会えなかったと言います。「相手のことを、結婚してから知っていた。」と言っています。

感情に反して意志を働かせるところに、新たな感情が生まれます。感情というのは、浮き沈みがあつて当たり前です。いや、浮き沈みがあるからこそ感情と言います。詩篇を読まれたら、そこには激しい感情の起伏が、ものの見事に言語として言い表されています。しかし、「主を待ち望め」と言って、自分の感情を殺していませんが、その感情に埋もれることなく信仰表明を行っています。そして、その信仰表明を行なった後で、喜びや感謝があふれてきます。感情に反して意志を働かせる時に、その意志に付随する新たな感情が心から湧き出てくるのです。

ある時、カリフォルニアのカルバリーチャペル聖書学校での、ある若い牧師さんが、これまた若い二十代ぐらいの若者の学生に説教している動画を見ました。アブラハムがイサクを捧げる話です。彼は言いました、「アブラハムは、イサクを捧げたいと感じたことは一切なかった。神への愛は、神の命令にただ従いたいという意志に表れていた。」というような内容でした。誰が愛する独り息子を失いたいでしょうか？そして、もし愛が単なる感情であれば、神はご自分の独り子を十字架における残酷な死に引き渡すことは決してなさいません。絶対に、この息子を罪の供え物などにしたくありませんでした、感情においては。けれども、それを行なったのです。それは、私たちを愛してやまない意志の表れであります。

英語に存在して、日本語にない、適切な言葉があります。それは Commitment(コミットメント)です。Commitment(コミットメント)は日本語で訳しにくい言葉ですが、辞書を調べるとこう書いてあります。「[人や大義などへの]傾倒、献身、深い関与[義務に対する]責任、専念[破れない]約束、言質[契約上の]義務、誓約(「英辞郎」より)」。そして、「カルバリーチャペルの特徴」という本が出版されていますが、英語の原書にある Commitment の言葉が、「心に決める」と訳されていました。とても良い訳だと思いました。あるいは、「前もって心に決める」と言うこともできますし、「心で決めて、後は主にゆだねる」と言い換えることもできるでしょう。

心に定めた人として、高く評価される人物はダニエルです。彼とその友人三人は、王族の子としてバビロンに捕え移されました。その少年たちは、これからバビロン政府の役人として働くために、エリート養成の教育を受けました。バビロンの文学や言葉を徹底的に学びました。そして、自分た

ちの名前を、バビロンの異教の神の名が入っているバビロン名に変えられました。けれども、ダニエルは心で定めていることがありました。「王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。(ダニエル 1:8)」とあります。偶像に供えられた肉、また血が入っている肉であったので、主の律法では汚れているとされているものです。異教の文化に生きていましたが、自分はイスラエルの神を主としてあがめるのだ、という心定めを前もって行っていたのです。バビロンの他の文化的側面は受け入れても、この部分は自分の身を犯すという線引きを明確に行っていました。

2B 心で決める事

そしてもう一つ、大切な言葉が「心」です。心に定めたのであり、思っただけではなかったことです。主は、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。(マルコ 12:30)」と命じられました。それぞれが、人間の中で異なる部分を指しています。思いよりも、心は私たちの知性、意志、感情よりも、もっと深いところに位置するものです。私たちの存在を意識する部分にあります。人の存在の核になる部分です。心は、私たちの個別の行為よりも、存在そのものを教える部分です。

ナルニア王国物語の作者 C.S.ルイスは、罪についてこのように話しました。「われわれは、自分が犯した個々の罪深い行為のほかに、自分の罪深い性質そのものに気づき始める。自分が行なうことに驚くばかりでなく、自分の心のあり方それ自体に驚くようになる」罪の具体的な行為よりも、自分の存在にある罪を知ります。それは思いではなく、心で知ることになります。

かつて、正しい人ヨブという人がいました。彼に襲いかかる数々の災難がなぜ降りかかったのか、友人たちは彼が何か隠れた罪を持っているかもしれないと思って、それを指摘しました。ヨブは思い当たる罪が何一つないので、自分の義をずっと主張していきました。それなのに、なぜ神がこのように辛く当たるのか分からないと言いました。けれども、主ご自身が現れました。そしてご自分の全能の力、天地を創造して、すべての自然界を支配されているご自分をヨブに示されました。そしてヨブがこう告白したのです。「私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。(ヨブ 42:5-6)」このヨブの罪の告白は、特定の罪ではなく、自分の存在、罪の性質を持っている存在に対する悔い改めです。そして、この悔い改めを行なったヨブは、行為における正しさではなく、生ける神を仰ぎ見るという、正しい神を信じる信仰に立つことができました。この方のみが正しいのだと認めて、それで彼は義と認められたのです。

私たちは、その心の部分において、主を求めると決めるのです。主を求めることを、その時々思い付きで行おうとすると、レハブアムようになります。思いは、右から左、そして左から右へと動いていくからです。思いは移ろうのです。今年の夏、私は見ていませんが、戦時中に生きたクリスチャン家庭を描いた「少年 H」という映画が上映されました。その中に、このような台詞があった

そうです。「みんな海底で揺れるワカメだ」校内で、軍事教練で生徒たちをシゴキ殴りつけた配属将校が戦後は急に丸くなり、民主主義を口にし、少年 H に対しても丁寧言葉で接したそうです。あまりの身の変わりの早さに、海底に流れるワカメであると形容したそうです。心ではなく、思いの中にだけ主を抱いていると、私たちもワカメのように、思いついた時だけ主を思い出すということになってしまいます。

私たちはいつも、自分を見つめ直す時に、「何を行っているか」に注目する以上に、「主の前で自分はどうなっているのか」に注目する必要があります。英語でいうと、Doing の前に Being、つまり「行為」の前に「存在」です。この真実な愛の関係に立脚している時に、私たちはどんな時でも主を呼び求めるといふ、ぶれない自分を発見することでしょう。

心で主を求めると決めれば、楽になります。なぜなら、主を求めると心で決めてしまえば、残りは主ご自身が私たちの心で働いてくださり、私たちの心を変えて新たなにしてくださる、主が事を私たちのうちで行ってくださいます。自分が遠くに離れている主の命令に背伸びして近づくのではなく、主が私の心の真ん中にまで来てくださり、この心と志に働いてくださるのです。